

担任と連携し、児童の気持ちに寄り添った対応について

不登校児童の状況

対象児童は、小学校3年生である。入学時より集団の中で生活することが苦手で、小学校2年生から教室にいることが難しくなった。教室内の友達の視線が気になり教室にいることができない、みんなと同じようにできない自分を受け入れることができないという状況にある。

具体的な取組

○充実感をもって過ごす工夫

校内別室にて充実した時間を過ごすため、工作、カードゲーム・ボードゲーム、体をつかった遊びなど多様な活動を用意した。当該児童が各種活動の中から実施する活動を選択・自己決定できるようにした。



○児童の関わりを充実させる工夫

校内別室に登校してきている児童同士の関わりを大切にするため、当該児童の状況に応じて、意図的に児童同士が関われる場を設定した。

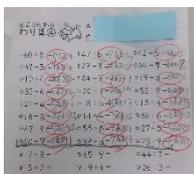
関わり合いの初期には支援員も活動に加わりながら児童相互の関わりを支援した。



○担任との連携

担任からの声かけや励まし、称賛は当該児童にとって大きな喜びであるため、校内別室での当該児童の様子を担任と共有する時間を設定した。

授業で行った学習プリントを別室で行った際には、担任が採点や評価を行った上で担任から当該児童へ直接返却できるように時間を調整した。



○管理職やSCとの連携

担任以外の大人と関わる機会を増やすため、校長や副校長、SC等と連携し、当該児童の情報を共有しながら様々な職層の大人が校内別室での支援を行った。担任以外の大人が別室に来て当該児童と活動することで当該児童は多様な他者につながっているという安心感を得ることができた。



成果

1学期は週の登校日数が2・3日だったが、2学期はほぼ毎日登校できるようになった。漢字や計算等の学習には全く関心をもたなかったが、今では少しずつ取り組めるようになった。運動会練習では、うまく学年の輪に入れなかったが、当日は、朝からクラスの友達と活動することができた。

課題

校内別室には登校できるようになったが、所属する学級には戻れていない。当該児童が戻れそうな教科の時間から段階的に教室復帰をするための計画策定について、当該児童の状況を踏まえ検討を重ねていく。